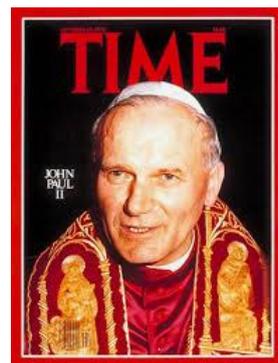


お久しぶりです。二週間前に怪我をして少し休んでいました。その間いろいろと考えることがあったのですが、一つは29期生の皆さんに通信を書くこと言うことでした。以前みんなが高校1年生のとき「あたまを耕す」という題で哲学などについて書いていましたが、途中で私が息切れして中断になったことは覚えていますか。もう受験勉強に忙しくなったときに、これを再開するのはちょっと不適切かもしれませんが、みんなが精道を去る日が近いと考えると、言い残したことが沢山ある言う思いが募って、清水の舞台から飛び降りる気持ち、あるいは背水の陣の気持ちでもう一度書こうと決心したわけです。事実はこれほど大げさなものではありませんが、今読む時間がなければファイルして、卒業して余裕ができたときにでも読んでくれれば幸いです。(捨てないでください)



閑話休題（それはさておき）、何年か前『宗教がわかれば世界が見える』という本が話題になったことがあります。日本では世界において宗教がもつ重要性が十分に理解されていない、そのままでは世界を理解できないという言い分です。なるほどと思いました。いくらかの例を挙げましょう。

2005年4月にローマ教皇ヨハネ・パウロ2世がなくなったとき、その葬儀には二百カ国以上の指導者が参列し、その中には、イランやシリアの大統領など宗教の違う人達も大勢いました。式自体には30万人が参加し、教皇の死後を受けて世界各地からローマにやってきた人の数は五百万人に上ると言われます。ともかく葬儀の参列者のリストを見ると驚きます。例えば、アナン国連事務総長、合衆国のブッシュ大統領、イギリスのチャールズ皇太子とブレア首相、ドイツ首相、フランスのシラク大統領、南アフリカのネルソン・マンデラ元大統領などの名前が見られます。では日本からは誰が出たと思いますか。小泉首相ではなく、大臣でもなく、首相補佐官（もと外務大臣）でした。これほど世界のトップクラスが集まる機会なんてめったにありませんから、もしその場に首相が行っていたら、よい外交ができたのにと残念に思いました。



かつてソ連の独裁者スターリン（共産主義の思想に従って宗教を根絶やしにしようとした）が、ローマ教皇には注意しないといけないと言われたとき「教皇はどれくらいの軍隊を持っているのか」と尋ねたそうです。国や人を計るのに軍力や経済力だけで判断するのは唯物論者なら当然のことでしょうが・・・。日本はさすがにそういう評価はしなかった。第二次世界大戦の末期に秘密裏に連合軍側と終戦の交渉をしようとして、バチカンに頼ろうと考えた政府の人もいたそうですから（しかし結局ソ連に頼り大失敗した。日本政府が海外の情報を仕入れることが下手で、反対に国内の秘密を外国のスパイに知られまくりというのが現状です）。ただヨハネ・パウロ2世の葬儀のときは、この教皇が世界でどれほどの評価を受けていたかを見誤ったと思います。海外、特に欧米でローマ教皇が権威を持っていることは、1994年にはヨハネ・パウロ2世が、2013年には現教皇フランシスコが合衆国の雑誌『タイム』のMan of the yearに選ばれたということでもわかるでしょう。

日本と欧米での宗教についての感覚の違いを示す例をもう少し紹介しましょう。江戸幕府がキリシタン迫害のための手段として踏み絵という制度を取り入れたことはよく知られていますが、この制度が欧米でどれほどの嫌悪感を持って見られたかは日本では知られていません。『ガリバー旅行記』を書いたイギリス人のスイフト（1745年没）は、小説の中でガリバーを日本まで行かせ、絵踏をしてまで

日本貿易の利に執着するオランダ人を風刺しています。オランダ人も絵踏をしているという噂にはオランダ人自身も恥じていて、なんとかそれを否定しようと躍起になっていたそうです（片岡弥吉、『踏み絵』91頁）。

幕末に日米通商条約を結ぶために来日したハリスは、条約締結の一年前にこう言っています。「私も日本との条約に成功するならば、私は日本在留アメリカ人が信教の自由を完全に行使し、また教会を建てる権利を持てるように要求するつもりだ。また十字架踏みのしきたり（踏み絵）も廃止するよう断固として要求したい。オランダ人は250年もの間、卑怯にもそれに何の抗議もしないで見過ごしてきた」と。日本では通商条約だから商売の話しだけだったと思われがちですが、宗教もことも重要な議題だったということです。ハリスとオランダ人出島の館長クルチウスという人が踏み絵に抗議して、とうとう1857年にこの制度が廃止になりました。

明治維新の直後、岩倉具視を筆頭とする視察団が欧米列強を訪問した（1871~73）ことはみんなもよく知っているでしょう。目的は不平等条約の改正でした。しかし、この訪問団が行く先々でキリシタン迫害を非難されたことは知っていますか。最初に着いたアメリカではグラント大統領から「信仰のために国民を迫害しているような国とは対等の条約は結べない」と言われ、次にイギリスではヴィクトリア女王から、またデンマークの国王からも非難を受けたのです。岩倉たちは「なんでアメリカの大統領が日本のど田舎の貧しい農民のことなんか問題にすんねん」と舌打ちしたかも知れません（1865年に浦上の信者が「発見」され、1867年からそれらの信者に対して厳しい迫害が始まり明治政府も迫害を続けたことが、欧米に広く知られていたのです）。

天正遣欧使節が当時の南欧世界でどれほどの歓待を受けたかについても言えます。地方の大名の子弟たちは、マドリッドでは「太陽の沈むことのない帝国」の首長スペインのフィリペ2世（1598年没）、ローマではグレゴリウス暦を作った教皇から、その他行く先々の都市でも大歓迎を受けたのです。この事実も日本ではあまり知られていないと思います。



このような事実が中高の日本史の教科書には出てこないことは、日本では宗教問題があまり大した重要性を持たないと一般に考えられていることも一因でしょう。つまり、宗教とは私的なことで、政治や経済や軍事とは違って社会を動かす力はなく、それゆえ公の場所で話すことではなく、ましてや国家間の問題になるはずがないと考えているのです。

私が言いたいのは、日本ではそうであっても外国ではそうではないということです。今グローバル化が進み、もう日本の国内だけに閉じこもって暮らしてけるという時代ではない。確かに世界を相手に仕事をするためには英会話ができないといけませんが、それと同時に世界を知り、しっかりしたものを見方を身につける必要があります。でないと、世界の舞台上「何も知らん無知な奴や」とさげすまれたりするなんてことになるかも知れません。特に欧米との関係を念頭に置くなら世界史とキリスト教と西洋哲学の知識は非常に役に立ちます。もちろん、キリスト教の知識は、単に社会生活や職業上の利益といった現世利便的なことより、よりよく生きるために興味を持って欲しいのですが。

そこで、プリントの形でキリスト教や哲学の基本的な知識を復習したいと思います。精道を卒業しながら、キリスト教に関して無知だったということになったら、私の責任も少なくないので・・・。

（これは以前、高校4期生に書いたものを少し修正したものです）